

乎。この人々の爾に立る證據の如何。耶蘇默然たり。祭司の長更らゝ責めて曰く、爾キリスト、神の子なるか、我さんちを活神は誓せて、之を告げんと。耶蘇の先きに黙然たり、これ語るも、語らざるも、固より罪に陥るとの計なるを知らず也。然れども今や其身分を問ひ、これ己の世に來りし職分にして、明かにせざるべからず。此に於てか、沈黙を破つて曰く、「爾が言る如し。且ぬれ爾曹に告げん。此のち人の子、大權の右に坐し、天の雲に乗て來るを、爾曹みるべし」と。祭司の長、此言を聞くや、果して然り。遂に我計畧に落ちたりと思ひしが、大に怒りたる風して、保守黨を激昂せしめんとして、故らにその衣を裂て曰く、此人の褻瀆ことを言へり。何ぞ外に證據を求めんや。爾曹も今その褻瀆たることを聞く、さんちら如何よ。おもふ乎と。彼等一齊に答て曰く、彼の死に當れりと。是は於て彼等交も耶蘇の面に唾し、且拳にて撃てり。また或る人かれを批いひける、

リストよ、爾を撃者の誰か、我儕は預言せよと。而して耶蘇の頭を垂れて沈黙せり。此時衆弟子皆な離散せるが、ペテロの耶蘇の最後を見んとして衆民に雜りて、カヤバの庭に坐わたりしに、或嫉きたりて、爾もガリラヤの耶蘇と偕ありと曰ければ、ペテロ凡ての人の前に、此言を肯はずして我さんちが言ところを知らずと曰へり。出て門口に至れる時、また他の婢これを見て其處よをる者云つて曰く、此人もナザレの耶蘇と偕に在りしと。ペテロまた肯はずして誓ふ、曰く我この人を知らずと。暫くありて旁らに立たる者す、み近てペテロに曰ける、誠は爾も、その黨の一人なり。蓋さんちの方言なんちを顯せりと。是に於てペテロ誓り、且誓て、我その人を知らずと曰しが、頓て雞鳴ぬ。ペテロ耶蘇の雞あかざる前に、さんち三次われを知ずといはんと云へる言を憶起し、外に出で悲しみ哭きぬ。

夜已に明けたれば、祭司の長と、學者等、耶穌を殺るさんとして、之を縛し  
 先づ羅馬の中央政府を代表する方伯ポンテヲ、ピラトに引き渡せり。此  
 報を聞くや、萬民皆な意外の思を爲し、神の子の何ぞオマ〜と殺され  
 んとするや、何ぞ其異能を以て、之を逃れざるかと罵りしもの、如し。蓋  
 し彼等の多くの、天國の意義に通せざれば也。而して耶穌を賣りたるユ  
 ダも、其愆よ死罪と定るを聞きて、最も失望せる一人なりき。其耶穌を  
 賣るや、耶穌は怨あるよあらず。耶穌を信すること、敢て人よ後るゝにあ  
 らず。唯だ之を賣りたるの、之を迫りて、以て地上の天國を建てしめん  
 したるのみ。彼は必らず、異能を以て、刑辟を避くべしと信じたる也。沈黙  
 して己の無辜を辯せず、從容として死につくを見て、其地上の天國を  
 建るの望なきのみか、實に初めて耶穌の天國の、此世よあらずして、彼  
 の世にあるを覺り、空しく耶穌を苦しめたるの大罪を覺りて、一刻も

猶豫する能はず。直ちに祭司の長に至りて、耶穌を賣りたる三十金を返  
 して曰く、無辜の血を付し、我の罪を犯しぬと。彼等答て曰く、我儕に於て  
 何ぞ與らんや。爾みづから當るべしと。ユダ其銀を殿に投棄て、其處を去  
 りゆきて自ら縊れて死せり。

已にして保守黨と、事大黨との、ピラトの廳に至りて、耶穌を訴へて曰く  
 我儕この人が、民を惑し、税をカイサルに納むることを禁み、自ら王ある  
 キリストと稱るを見たりと。これ天國の福音を述べたる耶穌を以て、政治  
 的犯人として訴へたる也。然れども、ピラトの曾て耶穌の教を傳聞した  
 ることありて、其崇高絶妙なる思想に驚けり。古より云ひ傳へたる、神子  
 微服の説を思ひ比べて、これ或は事實あらんも知るべからずと思へり  
 故に輕々しく此の如き訴に、手を下すことを好まざるより、訴人に告げ  
 て曰く、如何なる訟をもて、斯人を訟ふるやと。人々こたへて曰く、彼もし

惡を行せる者にあらすバ、爾に解さじ。ピラト彼等に曰ける、爾曹これ  
 を取り、なんぢの律法に從ひて、審判せよ。ユダヤの人々かれに曰ける、  
 我儕、人を殺の權ありしと。此に於て、カピラトも已むを得ずして、公廳に  
 入りて、耶蘇を召びて問ふて曰く、爾のユダヤ人の王なるかと。耶蘇の已  
 に死を決せり。何ぞ嗚々の辯解を要せん。然れども其職分と身分との之  
 を明かにせざるべからず。此に於て、カピラト問ふて曰く、爾このことを言  
 るの自己に由るか。而してピラトが答て、我のユダヤ人あらんや。爾の  
 國の民と祭司の長と、爾を我に解せり。爾なにを爲しやと云ふや。イエス  
 答ける、我國のこの世の國あらす。若しわが國、この世の國あらば我  
 僕われをユダヤ人に付さる爲に戰ふべし。然れど我國は此世の國な  
 らざる也』と。ピラト更らに彼に曰ける、然バ爾の王あるか。耶蘇答ける  
 『爾の言ふところの如く、我の王なり。我これが爲に生れ、これが爲に世

に臨れり。蓋真理よついで證を爲んため也。すべて眞理は屬者の、我辭を  
 聽く』と。ピラトの問答の際、精細に其容貌、風采、言語、意氣を觀察したる者  
 らん。此容貌、風采、言語、意氣の曾て十二の徒弟をして、生命を捧げて使へ  
 しめたるもの也。曾て幾十萬の民をして、讚美を歌ひしめたるもの也。今  
 や親しく之に接して、其崇高、絶大、温和にして、嚴肅なる品格に擊れし  
 ならん。已に其品格を見て、其云ふ所を聞く。争でか之を罪するを得んや  
 此に於て、カピラトは群民に告げて曰く、我の此の人に罪あるを見ずと  
 已にして其曾てガリラヤにありしを聞き、之をヘロデ王に送りて以て  
 此聖き者を刑するの禍を避けんとせり。蓋しがリラヤの、ヘロデの所管  
 なれば也。然れどもヘロデも、また多端に問ふも、耶蘇答る所なく、而して  
 其情を案するに罪とすべきものあるを。此に於て、カピラトが爲し得  
 たる所の、只だ其士卒と共に、耶蘇を侮辱嘲弄して、華服を纏はせ、衆人の

物笑とあし、またピラトに送り返すの外なかりき。これ其の情狀に於て罪すべきものなきのみならず、多數の人民の靜かに扣へたりと雖も、實は深く耶蘇を信奉せるものなれば、之を憚て然りし也。此に於てかピラトの避けんとして避け得ず、遂に耶蘇を處分するの位置に立てり。故に訴人よ告げて曰く、我もへロデも此人に罪あるを見ず。故に逾越の節に、必ず一人を釋るすことあれば、此人を答ちて、後釋さんと。然れども祭司の長と、長老等の教唆の深く、民の骨に入りて、援くべからず、群民一齊に呼はりて、曰く此人を十字架よつけて、バラバを許せと、バラバの城下よ一揆を起し人を殺して獄入りしもの也。此後ピラト百方耶蘇を刑するを避けんと欲するも、民訴へて已まず、曰く若し之を許るさば、これ羅馬の大帝よ忠ならざるもの也。これ凡べて己を王とするもの、大帝に叛くものなればありと。ピラトの大帝の臣也。最早耶蘇を許るすべ

からず。遂に之を刑するを許るして、兵卒に渡せり。當時の兵卒の、古今最も卑むべき兵士にして、掠奪、奸淫を以て、其職分の半ばとせるものにして、猶太の保守黨と全しく、耶蘇の徒に攻撃せられたるものなり。今や復讐の時來れりと爲し、至營に相會し、彼の衣を褫て、絳色の袍を着せ、棘にて冕を編み、その首は冠しめ、又葦を右手よ持せ、且その前に跪づき、嘲弄して曰く、ユダヤ人の王安かれと。或は又彼に唾し、其葦を取て、其首を擧てり。此の如く、嘲弄し畢りて、其袍をはぎ、故衣をさせ、大なる十字架を負せて、エルエタ（髑髏）と云ふ地に引きけり。此時、耶蘇と共に、二人の罪人を刑せんとて、十字架に釘けしが、一人を耶蘇の右、一人を左に置けり。二人の盜賊也。此の如く、殘酷無道の待遇を受けて、耶蘇は天を怨みず、人を尤めず。天を仰ぎて曰く、「父よ、彼等を赦し給へ、其爲るところを知らざるが故なり」と。應られたる罪人の一人、耶蘇を譏りて曰く、爾もしキリストなら

己と我儕を救へ。他の一人これへて、彼を責め曰ける、爾おなじく罪を受けながら、神を畏ざる乎。我儕の當然爲せしことの報を受かれど、此人の何も善からざる事に行ざりし也と。此くて耶蘇に曰ける、爾その國よ來ん時、我を憶たまへと。耶蘇答へける、「誠にあんぢよ告げん。今日なんぢの我と偕に樂園に在るべし」と。此時約を十二時より、三時に至るまで、地のうへ遍く黑暗と爲り、日の光くらみ、神殿の幔幕中より裂たり。已よして耶蘇大聲に呼り曰く、「父よ、我靈を爾の手に託く」と。遂に氣絶ゆ。嗚呼、これ耶蘇三年傳道の最後也。此の如き最後を見て、兵卒を指揮して、處刑せし流石の百夫の長も、この事を見て、神を崇め曰ける、「誠に此人の義人なりき。之を觀んとて、聚れる衆人、みな膺を拊て返れり。此の日は、大安息日よして、且つ節筵の備日あれば、罪人の屍を、十字架上にかくと不祥あるが故に、猶太人ピラトに向ひ、彼等の脛を折りて、屍を

除かんことを求めたり。是に於て兵卒等、耶蘇と偕に、十字架に釘けられし者の一人の脛を先にをり、次よ亦一人の脛を折、後に耶蘇よ來しよ已に死たるを見て、其脛を折ざりき。一人の兵卒、戈にて其脊を刺ければ、直に血と水と流出たり。此時耶蘇を磔殺するの評議に關して、異論を述べし議員、ユセフあるものありしが、ピラトに往き、耶蘇の屍を乞て、之を取下し布よて裹み、いまだ人を葬しことなき、石の鑿たる墓に置きしが、其翌日、祭司の長と「パリサイ」の人等、ピラトの所に集りて曰ける、「主よ、我儕憶起せり、彼の偽者いきて在りしとき、三日の、ち甦らんと語り。是故よ命じて三日よ至るまで墓を固守しめよ。恐らく其弟子、夜きたりて之を竊み、死より甦たりと民よ言ん。然らば後の惑の先よりも、愈勝るべしと。ピラト彼等よ曰ける、「守兵の爾曹にあり、往て意のまよ固守しめよ」と。此に於て彼等ゆきて石に封印し、守兵をして固守せしめたりき

安息日終りてのち七日の首の日黎明マクダラのマリヤ及び他のマリヤ、その墓を視んとて來りしに、大なる地震ありて天の使空より降り墓の門より石を轉じ、其上に坐す。その容貌の閃電のごとく、其衣服の雪の如く白し。守兵かれを見て懼戰きて死たるもの、如くなりぬ。天使婦人に曰ける、爾曹おそる、勿れ、我あんぢらが十字架に釘られし耶蘇を尋るを知る。彼の此に在らず、其言る如く、甦りたり。爾曹きたりて主の置れし處を見よ。且ゆきて其弟子に告よ彼の死より甦り、爾曹に先ちてカリヤヤに往り。彼處に於て爾曹かれを見るべしと。婦人等懼ながらも甚く喜びて、急ぎ墓をさり、其弟子に告んと走り往り。弟子に告んとて往くとき、耶蘇彼等に遇ひて安かれと曰給ければ、婦人す、みて其足を抱て拜しぬ。耶蘇重ねて彼等に曰ける、懼る、勿れ、去て我が兄弟にカリヤヤに往けと告げよ。彼處にて我を見るべし。守兵のうち或者ども、城に至

り、凡て有しことを祭司の長等よ告しが、ピラトが此報を羅馬の朝廷に上るや、ダイベリウス帝大に震驚して、尊號を耶蘇に上りて、神の一とせんとせしが、元老院のため遂げざりき。(歴史哲學)

然り元老院の此を認めざりき。然れども十一人の弟子のガリラヤに向つて走り、耶蘇を見て拜せり。然れと疑へるものもありき。耶蘇進みて彼等に語ていひける、「天のうち地の上の凡の權を我に賜れり。是故に爾曹ゆきて萬國の民に、洗禮を施し、之を父と子と聖靈の名に入て、弟子とし、且つわが凡て爾曹に命せし言を守れと、彼等に教よ。夫れわれの世の末まで常よ爾曹と偕に在るあり」と。此に於てか、英氣沮喪、亡國の遺臣の如く、四方に離散せる弟子の、英氣を回復せり。天國の來ること、耶蘇の甦る如く確實ありと信せり。此に於てか、勇氣勃々、道を分ちて四方に傳道せり。或る者の獄中に死せり。或る者の石もて撃ち殺されたり。或る者の

十字架にかゝれり。千百年間、千百萬人此の如くして死せり。然れども甦  
 の一事よりて、確められたる天國を來さんよ。何ものも比ぶるに足  
 らずとなされたり。而して天國の遂は近けり。何となれば耶蘇の刑せら  
 れしのち、彼の生涯の詩の如く、詠せられ、歌の如く誦せられ、萬民の心に  
 入りての盡きざる泉の如く、涌き出で、人と人との間を和らげ、神と人  
 との間を和らげ、彼の教ゆる所の正義の太陽となり、煌々として東天よ  
 光り、罪惡と悲慘の滅びて、福音の音の來ること、春山の雪消へて、萬緑の  
 現るゝが如くなるものあれば也。

彼已に逝く。然れども彼の過去の歴史となり、了らすして、未來の理想と  
 なれり。遠き想像とならずして、現實我心よ宿る者とされり。羅馬教會の  
 彼のためは建てり。十字軍の彼のために起れり。ルウテルの彼よりて  
 立てり。ガスマウアス大王の彼のために命を沙場は捨てたり。クロンウ

エルの彼のためは戈を取れり。スヌットランドは一國を焦土として彼  
 のために戦へり。ミルトンの筆、彼のためは輝き、ハンファデンの劍、彼がた  
 めは鋭く、之を先きよしての、ポリカーフ、之を後にしての、ジョン、ハスは  
 彼のために憤然として火刑につけり。金口のクリソストム、彼のため  
 は一代の腐敗と戦ふて、山間を窮死せり。巨僧アムプロイス、彼のため  
 は勝王セナドシユウスの權威を、足下に蹂躪せり。

唯だ理是れ求むるローナン、彼のためは叫びて曰く、親愛ある主よ、われ  
 らの汝を距ること如何ばかり遠きや。汝の温良、汝の詩、何所よか見出す  
 べき。汝の此ら互ひに競ひ、相共に權に争ひ、事みあはのれより出ること  
 を望めるものを、汝の門弟子たるを免したりや。彼等の人なり、汝の神な  
 りきと。放縱あるルウソウの、彼の前は頓首して曰く、有ゆる哲學者の著  
 書の其盛裝を以てすらも、福音書と比較しての、如何に微小あるよ。人の

書ける文にして、其の如く崇高にして、之と共に質實あるものあり得べき乎。其書に記されたる者の、果して單に人と云ふの外なき乎。彼の品性は於て、果して野心深き黨派熱の如きものにありし乎。彼の道の如何に温雅にして、且つ如何に清潔に、彼の教は如何に恩に富めるよ。彼の品格は如何に崇高にして、其語よ如何に深奥なる知恵の含まれたるよ。其應答の巧妙にして、如何に適切なるよ。己の怨を勝つこと、如何に強きよ。凡そ世に彼の如く仮面おしよ、彼の如く弱點おしよ、働き、苦を忍び、且つ死たるものある乎。聖人にも之ある乎。と而して彼の唯我主義の大魔王ナポレオンをしてアレキサンドル、シーザル、シヤールマン及び余の大帝國を建設せり。然れども吾等の事業の何に屬する乎。方に屬するのみ。特り耶蘇の愛の上よ其國を建てたり。福音の單に一の書にてはあらず。之は反する凡べてのものに打ち克つ。の權威と力量とを有する活物也。

此に書中の書あり。余の之を讀むと飽かず。毎日同一の快樂を以て之を讀む。福音の美を以て温化せられたる靈魂の最早や其人の靈魂にはあらずして、全く神に屬す。其思想と思慮とを指揮するもの神なり。これ耶蘇の神性よ取りて、如何に好き證據あるよ。彼の教の生命の望也。安心の錨也。害惡の避け場也と呼べし。め。老雄ヒスマークをして、唯だ彼に一任するがために、紛々たる批評の中に立ちて、斷乎として後を省みざらしむ。古今の大人豪傑傲然として世界を睥睨するもの、彼に對しての小兒の慈母に向ふが如く、温然として謙遜す。彼が昔しありしが如く、今ま猶は萬民の心よありて盡きざる泉とある。此の如き耶蘇の、果して人なるか。嗚呼果して人なる乎。

基督傳記終



16/9/31

明治廿六年九月一日印刷  
明治廿六年九月七日發行

實價貳拾錢



著者 竹越與三郎

發行兼印刷者 今村謙吉

版權登錄

發行所 福音社

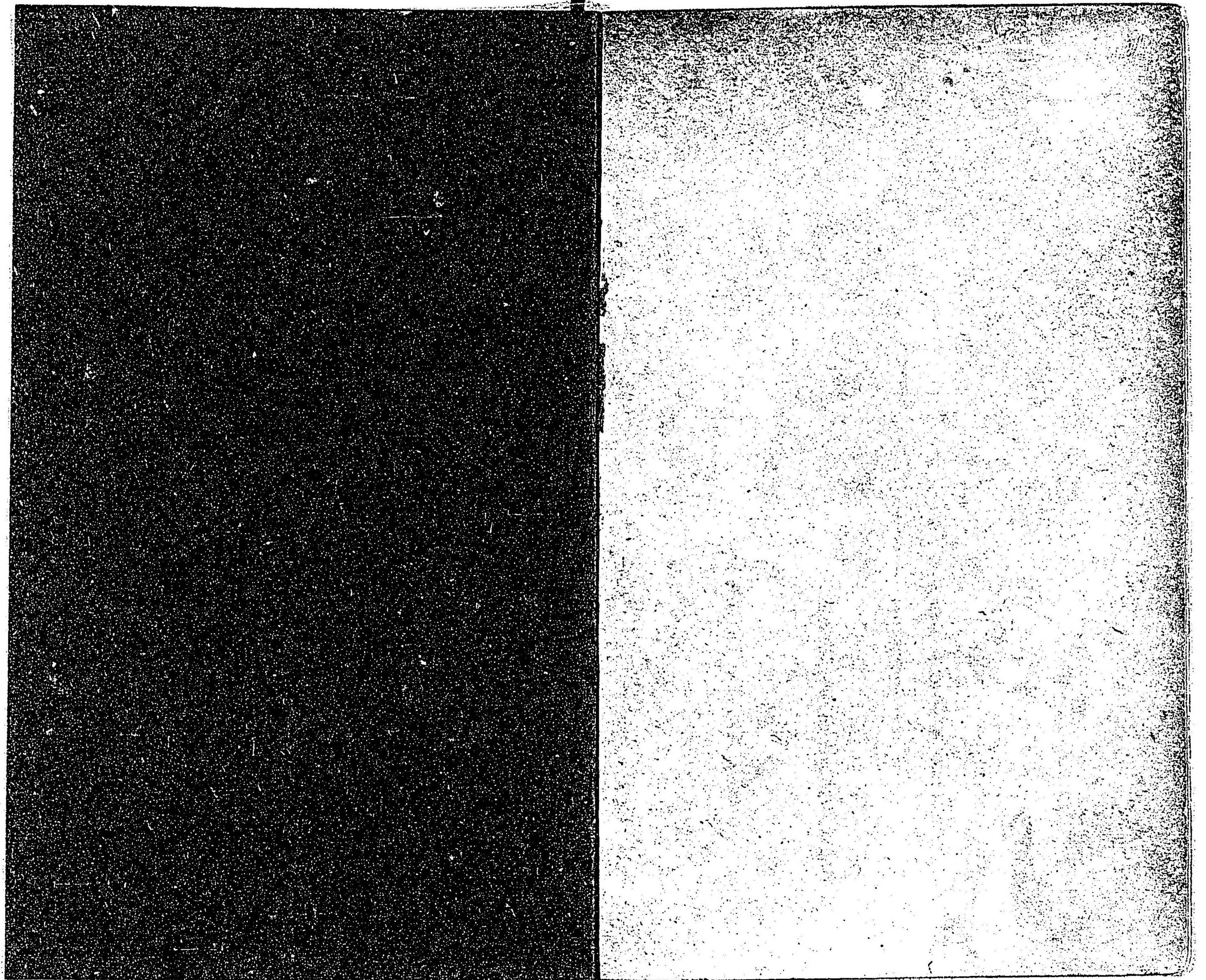
發行所 警醒社書店

東京市京橋區出雲町一番地

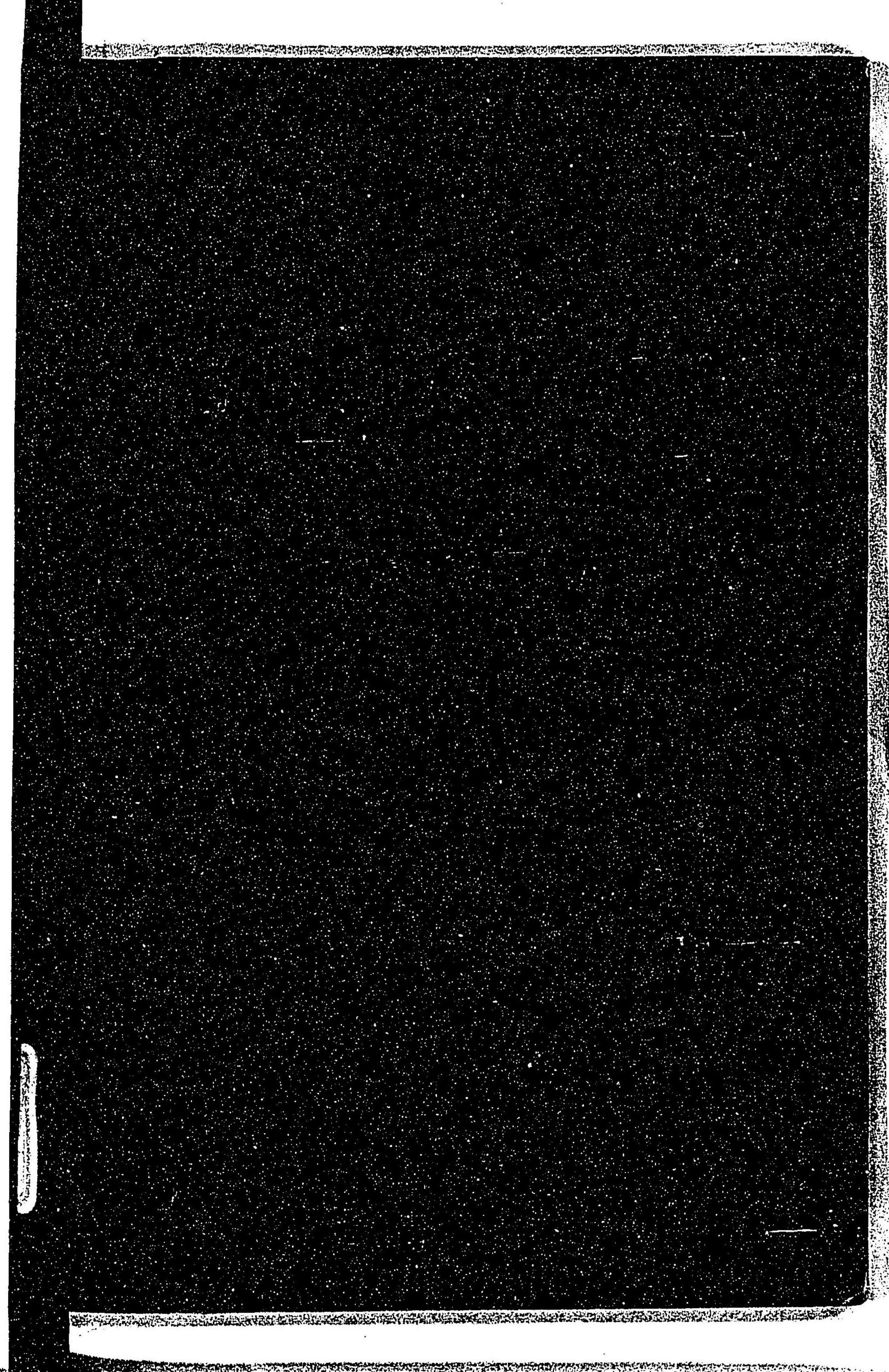
大坂市西區土佐堀三丁目

東京市麻布區霞町貳拾一番地

大坂市西區土佐堀三丁目卅八番屋敷



70
163



70  
163

020553-000-9

70-163

基督伝記

竹越 与三郎/著

M26

ABI-0366

